

## サトイモ（ハウス早掘り）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作 型												
主な作業	植 え 付 け					収 獲					ビ元催 ニ肥芽 ル・ 張畦 り立 て	

サトイモ サトイモ科 原産地：マレー半島

学 名：Colocasia esculenta Schott.

作物名：サトイモ

作 型：ハウス早掘り

肥沃で保水性、排水性に優れる土壌が適する。

乾燥は非常に発育を害し、特に早生子芋用品種では、裂球して腐敗の原因となる。

多湿を好むが、長期間過湿であると根の発育が害され、芋が長形となる。

### 技 術 体 系

#### 1 作型の特徴

厳寒期の栽培となるため、気温・地温の確保が生育・収量に大きく影響する。したがってハウス準備は植付け1ヶ月前にすませることが重要なポイントになる。

#### 2 適応地域

全域

#### 3 栽培条件

##### (1) 温度

高温多日照を好む作物で、発芽の最低は15℃、発芽適温は25～30℃である。地上部は霜に弱い、芋は5℃までの低温に耐える。

##### (2) 光

多日照が生育を良くする。

##### (3) 土壌条件

土質に対する適応範囲は広く、すべての土壌で栽培可能であるが、壤土が最も適し、耕土が深くないと収量は上がらない。

#### 4 性状

草丈は1～1.5mに達し、葉身の形や葉柄の色は、品種により差があり、葉柄の色は緑色より赤紫色までである。根の伸長は活発で、横1m、深さ1mに及ぶ。

種芋の頂芽が発芽し、伸長するにつれ、葉柄の基部が肥大して、親芋を形成し、親芋が伸長するにつれ基部が子芋、子芋から孫芋、孫芋から曾孫芋へと塊茎が分球する。

#### 5 施設装備

単棟ハウス

#### 6 経営目標

(1) 収量 2 t / 10 a

(2) 投下労働時間 250時間 / 10 a

(3) 所得率 40%

(4) 経営規模 50 a

(家族労力2人の場合)

## 栽培技術

### 1 品種と特性

#### 「石川早生丸」

子芋用の極早生種、草丈低く、葉柄淡緑で葉柄基部に黒褐色の襟かけがある。親芋は小さいが、子芋、孫芋の着生多く、丸型で豊産性である。最も茸毛が多い。品質は粘質が強く、貯蔵性も強い。

#### 「早生蓮葉芋」

石川早生丸に次ぐ子芋用早生種、葉色は濃く葉柄は緑色で、葉はハスの葉のように、上向きになる。子芋より孫芋の発育がよくやや長丸型で良く揃う。粘質で、芋は最もえぐ味が少ない。収量は多いが耐乾性弱く、乾燥による亀裂が出やすい。

### 2 本圃の選定

- (1) 過湿、過乾燥地を避ける。
- (2) 耕土（作土）は深い所が良い。
- (3) センチュウがない所
- (4) 連作をきらうので輪作を原則とする。輪作は畑で5年、水田で4年間隔とする。

### 3 種芋の準備

#### (1) 選別

品種の特性を有し、品質収量性の優れるものを株単位で選抜し、種芋とする。

種芋の選別は、病虫害の被害がなく、頂芽が健全であり、子芋が丸型豊満で40g前後(30～60g)のものを中心に大きさの揃ったものを選ぶ。

#### (2) 消毒

黒斑病やネグサレセンチュウ発生の危険性がある場合は、植え付け前に必ず消毒を実施する。

浸漬後は、1日程度風乾して伏せ込みを行う。この間、10℃以下の低温にあてないよう注意する。

#### (3) 種芋量

一般的には早生種の石川早生丸を使用し、10a当たり300～400kgを準備する。

#### (4) 催芽

一斉に発芽させることが増収のポイントとなるので、育苗ハウスで催芽を行う。催芽床面積は10a当たり30㎡程度を要する。

電熱温床の場合、床幅150cmに電熱(10～15cm間隔に配線)を準備し、伏込みは、大芋から順次、くっつけて1段に並べ、約3cmの厚さに砂を覆土し、水をたっぷりかけ保温管理する。日中の温度25℃～30℃位に管理し、発芽するまでは乾燥に注意し、適度の灌水を行う。

催芽期間は約20日で5～6cm伸長させる。

### 4 本圃の準備

ハウスづくりは植付け1ヶ月前に準備し、地温の確保に努める。

#### (1) 土壌消毒

サトイモは連作を嫌い、連作すると収量が低下するので輪作を原則とするが、ハウスの高度利用などの理由で連作する場合は、有機物投入による地力つくりとともに、土壌消毒を行う。

サトイモは、センチュウ害を受けやすく、特にネグサレセンチュウの被害による減収は大きい。

また、芋表皮の褐変、裂開などにより商品性を著しく損なうので被害の予想される場合は殺センチュウ剤により土壌消毒を行う。

土壌消毒の方法は、まず圃場を耕起整地した後、殺センチュウ剤を注入し十分鎮圧する。ただちに古ビニルで表面を覆いガスの逸散を防ぐ。その後、定植までに2回程度耕起し、十分ガス抜きを行う。

#### (2) 施肥

全量基肥施用で植え付け20日前に、10a当り堆肥2t、苦土石灰100～200kg全面散布し、1～2回耕起、その後4～5日目に基肥施用し整地する。

施肥量				(kg/10a)
	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備考
元肥	15	20	15	堆肥 2t 苦土石灰
追肥	3	—	3	
全量	18	20	18	

## 5 植え付け

前もって作った植え付け溝に、種芋を立てて約30 cm間隔で平列又は千鳥植えする。

植え付け深さは15 cm以上とする。

(1) 時期 1月上旬～2月上旬

(2) 栽植密度 畦幅 1～1.2 m

株間 30 cm

2条植

10 a 当たり5,400～6,600株

## 6 植え付け後の管理

植え付け後直ちに灌水する。発芽揃いまでは、曇雨天を除き午前中に灌水し、地温上昇をはかり、発芽を促進する。温度は日中35～40℃、夜間15℃で管理する。7～10日で発芽を揃わせる。

発芽揃いから本葉5～6枚まで灌水は多目とし3.3㎡当り40～80ℓとする。

日中最高温度も葉焼けを起こさない程度の35℃前後で管理する。

分けつ茎は、1株1本立てとし側芽(茎)は早目に除去する。

本葉5～6枚頃、子芋の着生時は、草勢をみながら灌水量を加減する。また追肥もこの時期に行う。子芋の着生、肥大は本葉5～6枚頃から10枚頃となるので、この時点の本葉を最も大切に管理する。

## 7 収穫

5月より収穫を始めるが、天気の良い日に行う。